

**製品名: ALK (リン酸化 Tyr1096) ウサギポリクローナル抗体****カタログ番号: APRab04220**

研究使用のみ

**概要**

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	IHC, ICC/IF, ELISA
反応性	ヒト、マウス
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

**応用**

希釈倍率	IHC 1:100-1:300, ICC/IF 1:50-1:200, ELISA 1:10000-1:20000
分子量	150-240kDa

**抗原情報**

遺伝子名	ALK
別名	ALK; ALK tyrosine kinase receptor; Anaplastic lymphoma kinase; CD antigen CD246
遺伝子 ID	238.0
SwissProt ID	Q9UM73
免疫原	抗血清は、ヒト ALK 由来の Tyr1096 リン酸化部位周辺の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 1062-1111

**背景**

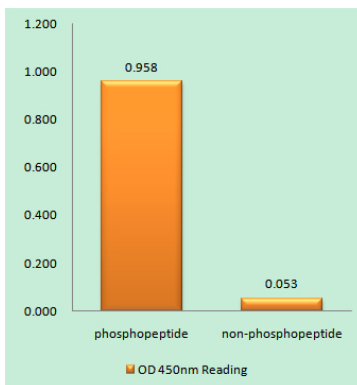
この遺伝子は、インスリン受容体スーパーファミリーに属する受容体チロシンキナーゼをコードしています。このタンパク質は、細

胞外ドメイン、1回膜貫通領域に相当する疎水性領域、および細胞内キナーゼドメインで構成されています。脳の発達に重要な役割を果たし、神経系の特定のニューロンに作用を及ぼします。この遺伝子は、未分化大細胞リンパ腫、神経芽腫、非小細胞肺癌など、一連の腫瘍において再構成、変異、または増幅が認められています。この遺伝子における最も一般的な遺伝子変異は染色体再編成であり、腫瘍形成において複数の融合遺伝子の生成につながる。これには、ALK (染色体2) /EML4 (染色体2)、ALK/RANBP2 (染色体2)、ALK/ATIC (染色体2)、ALK/TFG (染色体3)、ALK/NPM1 (染色体5)、ALK/SQSTM1 (染色体触媒活性: ATP + a [タンパク質]-L-チロシン = ADP + a [タンパク質]-L-チロシンリン酸。疾患: ALKに関連する染色体異常は、未分化大細胞リンパ腫 (ALCL) と関連している。転座 t (2;17) (p23;q25) と ALO17。疾患: ALKに関連する染色体異常は、炎症性筋線維芽細胞性腫瘍 (IMT)。CARS との転座 t(2;11)(p23;p15); SEC31A との転座 t(2;4)(p23;q21)。疾患: 非ホジキンリンパ腫の一種において、ALKに関連する染色体異常が認められる。NPM1 との転座 t(2;5)(p23;q35)。結果として生じるキメラ NPM1-ALK タンパク質はホモ二量体化し、キナーゼは恒常的に活性化される。恒常的に活性化した融合タンパク質は、非ホジキンリンパ腫の 5~10%の原因である。機能: チロシンタンパク質キナーゼ活性を持つオーファン受容体。神経系の正常な発達と機能に重要な役割を果たすと考えられる。Y-x-x-x-Y-Y 配列の最初のチロシンをほぼ独占的にリン酸化します。モチーフ。PTM: N-グリコシル化。類似性: タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属する。チロシンキナーゼファミリー。インスリン受容体サブファミリー。類似性: LDL 受容体クラス A ドメインを1つ含む。類似性: タンパク質キナーゼドメインを1つ含む。類似性: MAM ドメインを2つ含む。サブユニット: ホモ二量体。リガンドに結合すると、ホモ二量体となる。組織特異性: 脳と中枢神経系で発現する。小腸と精巣でも発現するが、正常リンパ球細胞では発現しない。、

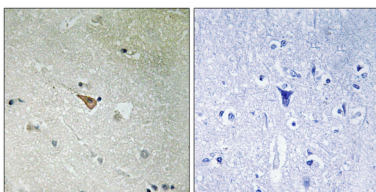
## 研究分野

タグとセルマーカー

## 画像データ



ALK (リン酸化 Tyr1096) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定法 (リン酸化 ELISA)



ALK (リン酸化 Tyr1096) 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした状態。